

## 看護人類学入門

Introduction to Nursing Anthropology

### 苦悩の慣用句 (12章)

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター  
Center for the Study of Communication-Design, CSCD  
池田 光穂  
IKEDA Mitsuho

1

## 受苦的人間

- 人は病いに陥り、病いを苦しみとして体験します。受苦的な存在として生きることは人間の宿命です。私たちは他者の「苦悩」(distress)を体験することはできませんが、それを感じることはできるようです。あるいは、そのように私たちは信じています。他者に対して苦悩を表現すること、そして他者の苦悩に居合わせること。このようなことは病気や災難との遭遇を通して日常生活の中で頻繁に経験すると言ってもいいでしょう。
- 苦悩する存在のあり方=ホモ・パティエンス

2

## ネルビオス (nervios)

- スペイン語で「神経」をさすネルビオ (nervio) (ポルトガル語ではネルボ (nervo)) に関係する言葉です。ここで取り扱うネルビオスにはアタケス・デ・ネルビオス (ataques de nervios, 神経の侵襲) あるいはたんにアタケスと呼ばれるものもふくまれます。メスティソ社会においてこれらの一連の用語は、ある種の身体の状態ひいては一種の病気 (看護人類学 (医療人類学) のいう「病い」に相当します) とみなせます。ネルビオスは、各個人においてその様態が多様でまた地域によっても差が認められるので、実際それを研究する者は、その分析においては多様に、言い方を変えると自由に気ままに解釈してきました

3

## こころの病気だという自覚がない

- 「医者は、わたしにネルビオスを伴った重い病気だと言いました。私は、自分が死にそうになっていたのに、単に頭の中の病気だと言われたことに、とても驚いてしまいました。サン・ホセの町では、卵やそのほかの食べ物を摂ることはできますが、それを食べると、私の胃袋がひっくり返ってしまうような気がします。頭や胸や両足が、恐ろしく痛くなり、とても恐ろしい気持ちになります。この病気が、いったい何であるのか、私には解りません。医者は、療養のために転地する必要がある、できる範囲で良いから出かけるように、と言います…」 (50歳代女性)  
[Barlett and Low,1980 : 544]

4

## ショック症状?

- 「私は、とてもひどいネルビオスに2度なったことがあります。それは私の子どもたちが、死にそうになったときです。最初は息子が馬から落ちて、死にそうだと言われたのです。私は倒れて、動けなくなりました。手足の感覚が無くなったのです。感覚が無くなったまま手や足を動かしました。人々は、私に民間薬をくれました。そして、私は町に行き医者は注射を打ち、薬を飲ましてくれました。私は治りました。」 「二度目は娘のアナが馬から落ちたときです。使い走りの子供がやってきて、アナが馬から落ちたと告げたとき、私の肌はこの恐ろしい感じに襲われたのです。それは膝から始まり、だんだん上に登ってきて、頭にまで達しました。病院で気がつくまで、私は何も覚えていません。娘は頭の3か所が切れており、病院に4日いました。私は病院には1日だけ入院していました」 (女性) [Barlett and Low 1980 : 544]

5

## 心身症?

- 「私は本当にわかりません。夫には問題がないのです。彼は酒も飲まないし煙草も吸いません。家では本当に静かなのです。私は、どうしてそう [ネルビオス] なのかわからない。自分自身に聞きます、どうして? 私がこの病気になることなんて、ありえません。なぜなら、私はひどい生活をしていないからです。夫が妻に対してひどい生活を強いるなら、そのとき問題は起きます。けれど、私の夫はそんなのじゃない。彼はいつもここにおり、私たちは決して言い争いません。なのに私は、いつもネルビオスになるのです」 (35歳女性) [Guarnaccia and Farias,1988 : 1227]

6

「民俗病」 (folk disease)  
「民族医学的概念」 (ethnomedical concept)

- 心身の状態を表現する、語彙と概念 (=病い・イルネス)
- 「身体表現性障害」 (somatoform disorder)
- 人々が心身の状態を表現することばは、ネルビオス以外にもたくさんあります。コレラ (colera), ビリス (bilis), エンビディア (envidia), ムイナ (muina), ススト (susto), エスパント (espanto) などです。これらは、私たちの「感情表現」語 (たとえば、怒り, 悲しみ, 憂鬱, など) と1対1の翻訳をすることはできません。

7

## 精神科医の語彙

- 「不定愁訴」「文化結合症候群@」「精神病理的反応パターンおよびヒステリー的人格」「急性分離反応」「急性分裂病的動揺」「詐病」「急性人格転換症状」「自殺発作」「多動症的なエピソードのある人格転換反応」「分裂病的障害」「文化的に受け入れ可能な苦悩症状」
- 医療の専門家の語彙=疾病 (ディジース)

8

## 「苦悩の慣用句」 (idiom of distress)

- 人々に了解された苦しみを表現するという謂で「苦悩の慣用句」 (idiom of distress) [Nicher,1981] と名づけてもよいかもしれませんが、このような概念でくくることの効用とは、これらのことばを身体に対して貼り付ける病名のアナロジーで考えるよりも、身体の外部と密接に関わる人間の存在様式を社会的次元に拡張して考えることができる点にあります。

9

## 「神経」の意味論

- 医療にたずさわる研究者がネルビオスを「民俗的な」病気のラベルとして貼り続けることには無理からぬところがあります。それは、人々が治療を求めて実際に多くの医療機関を訪れるからです。人々の治療要求とそれに対して病気を同定し治療的に関与していく運動のなかで、ネルビオスが「病気」として実体化して行くことは当然として予想されます。

10

## 私のフィールドノート

- イーラ (hirra) あるいはコレラ (colera) は、怒りや激怒を表わす状態ないし病気 (enfermedad) と考えられている。イーラになると、人は忍耐が欠けてきて、ときに人を殺めることもある。病名としてイーラを使うとき、それは「ネルビオスの病いのひとつである」 ([hirra] es una enfermedad de nervios) と表現される。「ネルビオス」は、私たちのいうところの「神経質」あるいは「気がたっている」状態である。これは、ふつうの人びとが一過性に経験する感情の状態あるいは病名である。「気難しい」人を表現するのに使われるネルビオスまたはネルビオーサは彼らの常套句である。

11

## 「狂気」

- 「狂気」 (lunático) とは、「月 luna」が、その姿を変えるように、人の性格が周期的に変わっていく、そのような情動をいいます。ネルビオスが一時的な状態であるのに対して、狂気は固定的です。だから「狂気は治らない」とも表現されます。もちろんどんなものにも例外があります。つまり「呪術」 (hechicería) による狂気だけは回復が可能です。狂気もネルビオスもともに、時間を遡及してなんらかの道徳的原因について言及されることはありません。狂人というラベルを貼られた人に対しては回りの人びとは「哀れみ」 (lástima) の感情で接するべきだと人びとは言います。これは公的な意見としては誰もが同意しますが、実際は忌避や嘲笑ときには恐怖の対象にもなりません。

12

## 気質と区別しにくい

- ネルビオスは、一方では神経（ネルビオ）という身体の器官の1つの病いを指しながら、他方では「神経質」という訳語で与えられる気質のようなものでした。この場合のネルビオ＝神経とは生物医学的な意味における神経系のことではなく、そのような気質を形づくると人々によって考えられている器官のことです。人々はネルビオスが「気質のようなもの」と「神経という実体」が相互に関係するものと考えているのか、あるいは「気質のようなもの」と「神経」の統一体と考えていたのかは不明です。ただ後者のような言及はなく、前者の2つの意味を彼らは会話の中で使い分けていたというのが筆者の印象です。

13

## 神経が弱いとは？

- 人々にとって「弱い」（debil）という言葉は、しばしばその反対語としての「強い」（fuerte）との対比の中で考えられます。また、この一組みのセットは身体の壮健さに関する「わるい」（malo/-la）と「よい」（bueno/-na）という別の対比のセットと意味論的には重なります。たとえば、血液の属性が「よい」（＝病気になるにくい）あるいは「わるい」（＝病気になるやすい、あるいは病気そのもの）と言われるときには、それは同時にそれぞれ「強い血液」（sangre fuerte）と「弱い血液」（sangre debil）が含意されています。血液がこのような属性で分けられることは、男女という性差や人びとが考える「遺伝」（herencia）という面からも説明されます。身体的な壮健さにおいて、男は女より「弱い」ものであり、生まれながらに「弱い血」をもつと言われます。

14

## 増強・養生・遺伝

- 「強い／弱い」が同じ個人において盛衰するという見方も他方にあります。たとえば「弱さ」や「虚弱性」あらわすデビリダ（debilidad）という用語は、身体が一時的にだるく疲れた状態のみならず、病気そのものを意味します。人間の身体の虚弱性の原因となるのは、大人では「働きすぎ」や「考えすぎ」です。また子どもでは、栄養（nutrición）の不足によって起こると考えられています。子どもは、ある種の病気、たとえば、ススト（susto）によって身体がだるくなり虚弱状態になることがしばしば見受けられます。スストとは、びっくりした拍子に魂が抜け落ちて、元気がなくなり、病気になるやすくなることです。他方で虚弱を克服することもできます。日頃の「養生」（cuidado）によって血液を「強く」することも可能です。工業医薬品の「滋養の飲み薬」の類を飲む、野菜を多く摂ることがそれにあたります。このように「弱さ」の概念は、まず先天的な決定論（たとえば大人に対する子ども、男に対する女、生まれつきの「遺伝」）という大枠の上に、後天的な操作によって「強く」したり、病気によって「弱く」なったりすると説明されるのです。

15

## マチスモという欲望というシステム

- 求愛中の男の女に対する甘い誘惑や誉めそやしがそれです。マチスモという欲望というシステムにおける男性の権力の再生産のためには、セックスを通しての支配を貫徹し、その結果、女を「孕ませる」ことがなされねばならないと、筆者は現地調査でしばしば同年齢の男性たちから聞かされてきました。男性同士の会話の中で、男性が女性を支配した戦果の報告として孕ませた女性と子どもの数を誇らしげに語る場面に遭遇することは別に珍しいことではありませんでした。他方、男性がいかにか「家畜」のように欲望を発散させ、女性がいかなる迷惑を被るのかという、女性側からの道徳的非難や（より公的な場では適切な言葉が選ばれて）異議申し立てがなされることもしばしば耳にしてきました。

16

## 女の亡霊＝ジョロナ

- ジョロナ（泣き女）は、もとは貧しい【先住民や農民の】娘であり、愛人との間に何人かの子ども（婚外子すなわち庶子）をもうけていました。愛人が彼女を顧みなくなったとき【あるいは結婚への希望が打ち砕かれたとき】、彼女は自失のうちに自分の子どもたちを川で溺れさせ殺してしまい、自らも死を選びます。彼女の死後、亡霊となった彼女は毎夜子どもたちを探しまわり泣き叫ぶのです。そのとき、彼女は長い髪と白い装束をまとった美しいでたちであられます。そして夜中に会った男たちはジョロナに魅惑され、彼女の後についてゆき、そして最後には彼女を危険な場所【たとえば川の深みあるいは崖】に連れてゆくのです。次の日の朝、男たちは哀れな水死体となって発見されます【Horcasitas and Butterworth 1963】。

17

## 自殺率と殺人率の比較

- コスタリカ（1983年）の人口10万人に対する自殺による死亡率（実数換算）は5.4、殺人は3.9です。引用したデータの年代がちよっと古いのは、私が調査した時期のものを比較したかったからです。ちなみに日本（1989年）では自殺17.3、殺人を含むその他の外因は2.8、米国（1988年）ではそれぞれ12.4と10.2でした。

18

## 処女の誘惑

- 亡霊としてのジョロナは、男の欲望の対象としての究極の女であると言えないこともありません。長い髪と白い服は純潔としての処女を暗示します。人々（この場合は男性中心主義からみた）の考えによると、処女の征服は、女の身体に拭いきれない刻印を記すことによって男性の名誉とみなされています。その男は女性からみれば少し腹の立つ言い回しですが「女の最初の主」（primer dueño de la mujer）と表現されています。しかし、男は女に忘我するほど夢中になってはならないと教育されます。でないと、欲望の深みにはまり自らを屍として曝すことになるからです。

19

## 超自然界における優劣の逆転

- 現実の世界で女を搾取しコントロールすることに成功した男が、抑圧の反世界ではジョロナという超女性の罠にかかり確立した支配を失墜させるばかりでなく命すら失ってしまいます。ジョロナはその点で男性にとっての究極の「嫌悪すべき存在」となります。

20

## フェミニズムの狼煙

- ラテンアメリカにおけるフェミニズム思想は、男性中心主義の歴史的ビジョンを完全に転倒させてきました。歴史は「白人男性によるインディオ女性の征服」にはじまり「両性関係に暴力的要素をもち込んだマチスモの伝統は…男性優位のみならず、独裁性、大土地所有制、外国の支配と干渉、軍事政権など権威主義的現象と結びついて」いることが再発見されました。国際婦人年メキシコ会議（1975年）は「ラテン・アメリカの多くの女性が貧困と不正義からの解放と、これを再生産するマチスモ的な国際・国内秩序の変革を求める」という行動指針を提起しました。それは、世界認識が変わることが世界に対するかかわりをどのように変えるか、それがどのようなところに結びついて行くのかについて私たちに教えています

21

## 文化の型

- 『文化の型』（原著は1934年）は、フリードリヒ・ニーチェという哲学者の著作からヒントを得て、個々の文化にはさまざまな構成要素や人びとの価値観やふるまいというものがあるが、それらはひとつの文化のなかには内的に整合するようにはたらく傾向があり、その典型例として（古代ギリシャの）調和を重んじるアポロ的文化と、矛盾や葛藤のなかに価値を見出すディオニソス的文化という2つのタイプの対比を説明しました。そして北米先住民の文化を（古代ギリシャの）アポロとディオニソスというそれぞれ2つのタイプにわけるとすると、前者の代表をプエブロ先住民、後者の代表としてクワキウトル先住民を論じたことで有名な古典

22

## 比較という方法論

- 較という方法は両者の差異を通して、個々の内部における力の不均衡の様態を認識論的に暴露すること。そして、比較はこの新たな均衡点を模索することを私たちに要求するのです。苦悩の慣用語は世界に遍在しています。あとは私たちがそれをどのように問題化し、他者の慣用語が私たちとどのような関係にあり、どう関与するかということにかかっていると言えないでしょうか。

23

## 文献(1/2)

- Barlett F.P., and S.M.Low 1980, Nervios in Rural Costa Rica, Medical Anthropology, 4 (4) : 523-564.
- Davis, D.L., and P.J.Guarnaccia eds 1989, "Health, Culture and the Nature of Nerves", Medical Anthropology 11 (1) : 1-95.
- Guarnaccia, P., and P.Farias 1988, The Social Meanings of Nervios : A Case Study of A Central American Woman, Social Science and Medicine, 26 : 1223-1231.
- Horcasitas, F., and D.Butterworth 1963, La Llorona, Revista de Fuentes para el Conocimiento de las Culturas Indigenas de Mexico, 4 : 204-224.
- Kleinman, Arther 1982, Neurasthenia and Depression : A Study of Somatization and Culture in China, Culture, Medicine and Psychiatry 6 : 117-190.
- Low, Seta M. 1988, Medical Practice in Response to a Folk Illness, in "Biomedicine Examined" (M.Lock and D.R.Gordon eds.), 415-438
- Madsen, William 1960, The Virgin's Children : Life in an Aztec Village Today, New York : Greenwood Press.

24

## 文献 (2/2)

- Nicher,M. 1981, Idiom of Distress, Culture, Medicine and Psychiatry 5 : 379-408.
- Pan American Health Organization, PAHO 1986, "Health Conditions in the Americas,1981-1984(I)".PAHO,p.211.
- Scheper-Huge,N. 1992, "Death Without Weeping", Berkeley : University of California Press.
- 大貫恵美子1985, 『日本人の病気観』岩波書店
- カフリー, M. 1993 『さまよえる人ルース・ベネディクト』福井七子ほか訳, 関西大学出版部
- クラインマン, A., 1992, 『臨床人類学』大橋英寿監訳, 弘文堂
- ダグラス, M. 1983 『象徴としての身体』江河徹訳, 紀伊國屋書店
- ベネディクト, R. 2008 (原著は1934) 『文化の型』米山俊直訳, 講談社現代文庫, 講談社
- レフ, J. 1991, 『地球をめぐる精神医学』星和書店